

令和8年度 学校経営計画・学校評価シート

高知県立高知江の口特別支援学校

<p>《高知県の教育の基本理念》</p>	<p>(1)学が意欲にあふれ、心豊かでたくましく、夢に向かって羽ばたく人 (2)郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人 (3)多様な個性や生き方を互いに認め、尊重し、協働し合う人</p>	<p>学校 像</p>	<p>◇子どもにとって 安心・安全に学べ、明日も通いたいと思える学校 ◇保護者にとって 子供を安心して任せられる学校 ◇病弱教育にとって 病弱教育の専門性を有し、センター的役割を發揮できる学校 ◇教職員にとって 個の力をチームの力にできる学校</p>	<p>目 指 け ず べ き 組 委 の 委 任 に</p>	<p>○「江の口の先生に出会えてよかった」と言ってもらえる高い専門性の発揮 ・個々の病状や特性に応じた指導力の向上 ・関係機関との効果的な連携 ○めざす児童生徒像を実現する特色ある教育活動 ・キャリア教育を中核にしたカリキュラムマネジメント ○職員が愛着と誇りをもてる職場づくり ・働き方改革</p>
<p>《取組の方向性》</p>	<p>4つの基本方針 ①「高知家」の全ての子どもたちが、急速に変化する予測困難な今後の社会を生き抜く力を身につけるための教育の推進 ②「高知家」の子どもたちを誰一人取り残さない、多様な背景・特性・事情等を踏まえた包摂的な教育・支援の推進 ③「高知家」の誰もが、生涯にわたって学ぶことができる環境づくりと活動・取組の推進 ④「高知家」の教育・学びの充実に向けた各種施策を総合的・計画的に推進するために、必要な基礎的・基盤的な環境・体制等の整備</p>	<p>目指すべき 児童 生徒 像</p>	<p>□自分に合った学び方を使って主体的に学び、豊かに生きる児童生徒 □多様性を尊重し、他者と助け合いよりよく生きる児童生徒 □自分の心と身体に適した生活を調整し健康な生活を送る児童生徒</p>		

《重点取組項目》 (評価 A:目標を十分に達成 B:ほぼ目標を達成 C:やや不十分 D:改善を要する)

項目	取組のねらい【P】	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】	中間評価後の取組内容【P-D】	年度末評価【C】	学校関係者評価	見直しのポイント【A】
<p>教育専門性の向上・ 専任内容の充実</p>	<p>「わかる、できる、学びたい」授業実践の充実</p>	<p>【現状】 (児童生徒) ○児童生徒は意欲的に学習に取り組むことができ、集団として力を高めることもできている。 ○自己の苦手を理解し、自分にあったペースで学習できている。 △目標や目的意識が弱く、学びに向かう意欲が乏しい児童生徒がいる。 (教職員) ○児童生徒の体調に配慮したり、授業形態や教材の工夫をしたりしている。 △児童生徒の学びにくさの背景を捉えることが難しい(障害特性・病状・意欲) △児童生徒の実態(興味・関心)に応じた個別最適化された指導ができていない教員がいる。(ex:興味・関心を引く教材選びができていない等) 【目標】 児童生徒が、「自分にあった学習スタイル」を理解できる 【評価指標】 ・「教員会での協議等を通じて、児童生徒の実態把握を適切に行い授業力が高まった」と回答した教員の割合が7割以上 ・「自分に適した学習スタイルに関する質問に肯定的に回答した児童生徒の割合が6割以上」 ・「寄附会生の心身状況や進捗状況が良い(レポート記録等)」 ・「指導方向上の機会に参加する教員が、昨年度と比べて増加する(R7:13人)」</p>	<p>【各ツールを活用した多面的な実態把握】 ・教務部は、可視化シート(ABC)で見取った実態に基づいた個別の指導計画の作成を支援する。 ・研究部は、Co-MaMeや流れ図等をチームで活用して児童生徒の実態を多面的に捉えるための研修を実施し、併せて、見取った実態に基づいた自立活動のための個別指導計画作成を支援する。 ・進路部は、キャリアパスポート及びキャリア発達段階確認シートの活用を定着させる。 【実態把握を活かした授業実践】 ・教務部と研究部は連携して、教員の授業力を高めるための教員会の仕組みを構築し、効果的に運用する。 ・学部主事と教科長は、学部・教科を超えて柔軟なチームティーチング(サブティーチャー等)の体制をつくる。 ・教科長は、児童生徒の実態把握をもとに、児童生徒の理解・定着・意欲を促進する授業につながるような教員会を行う。 ・研究部は、授業参観週間及び公開授業を設定し、全教員が他の教員の授業を2回以上参観するよう促す。 ・教員は、様々な学習スタイルを授業参観及びその他の研修から学び、実践する。 ・管理職は、音・声に加えて、高校との連携による指導力向上の機会を作る。 ・寄宿舎指導員と担任団は、連携して実態に応じた指導・支援を行う。</p>					
<p>キャリア教育の 効果的な推進</p>	<p>キャリア教育の効果的な推進</p>	<p>【現状】 (児童生徒) ○目標を持つことや具体的な体験をすることで将来のイメージを持つことができる。 ○キャリアパスポートの取組が将来的イメージを持つきっかけになっている。 △学習空白や体験不足などにより、将来のことをイメージすることが苦手である。 △適切な自己理解ができていない。 (教職員) ○キャリア教育を軸に教育活動を考えることができるようになった。 ○進路部の取組や支援会などを通じて得策を見据えた取組が進み始めた。 △教職員の認識に差があり、キャリア教育の充実には至っていない。(全校総合、教科指導、個別指導計画がキャリア目標とリンク) 【目標】 児童生徒が、「自分の将来をイメージできる。もしくは、理想に近づくために行動できる」 【評価指標】 ・「キャリア教育の視点で授業実践ができた」と回答した教員の割合が8割以上 ・「キャリアパスポートの児童生徒の記述や図からキャリア形成が進んでいる様子が見られる」 ・「他校及び関係機関等との体験的・効果的な交流が、昨年度より充実した」と回答した教員の割合が8割以上</p>	<p>【キャリア教育の充実】 ・各学部は、他校及び関係機関等との体験的・効果的な交流(交流及び共同学習等)を計画し、実施する。 ・進路部は、キャリア教育の視点でキャリアパスポートを活用し、進路学習や現場実習などを充実させる。 ・研究部は、キャリア教育をテーマにした研究と研修を行う。 ・各教科長は、キャリア教育の視点で授業実践が促進されるよう働きかける。 ・児童生徒部、学校安全部は、キャリア教育の視点で事業内容等の充実を図る。(分校と合同の文化祭、児童生徒規則の整備、地域と連携した避難訓練など) ・教務部は個別指導計画等とキャリア教育の計画を連動させた手順が定着するよう支援する。 ・各分掌部等は学校の取組などの情報を積極的に外部に発信するとともに、総務部は、教務部・DX推進部と連携して情報発信を促進する。 ・管理職は、教員が取り組む本物に触れる教育活動を積極的に支援する。 【キャリアパスポートの活用】 ・担任団は、キャリアパスポートを主体的に活用し、更に充実させる。 ・各イベント等を担当する校務分掌等は、キャリアパスポートが円滑に活用されるよう働きかける。 ・進路部は、キャリアパスポートの運用を検証し、改善する。 ・事務部は、社会に多様な役割分担があることを学ばせるために「学校を支える教員以外の大人」として働く姿を児童生徒に可視化させる。 ・カリマネ委員会は、教育活動の全校展開の仕方を提案し、進捗管理、評価、課題解決を行う。</p>					
<p>学校設定項目 関係機関との効果的な連携</p>	<p>児童生徒のウェルビーイングの実現</p>	<p>【現状】 (児童生徒) ○目標や目的意識が高まったり、余暇活動が充実したりしている児童生徒もいる。 ○実習などの経験により、自分の生き方を意識しようとする児童生徒もいる。 △他者の価値観を受け入れることが難しい児童生徒がいる(自己の殻に閉じこもる) (教職員) ○支援会等の開催により関係機関とのつながりが深まり、より良い支援策を考えることができた。 ○卒業後の支援を担う関係機関につながることで始めた。 △医療、福祉、教育等、それぞれの専門性を結集した取り組みが必要になってきている。(目指す方向性の違い等) 【目標】 児童生徒が、自分の幸せを考え、より良い生き方を模索することができる。 【評価指標】 ・「大学生などの外部人材を活用して教育活動が充実した」と回答した教員の割合が8割以上 ・「江の口の子どもと支援チームなどを活用し、外部の関係機関等とつながっている」と回答した教員の割合が9割以上</p>	<p>【教育活動充実のための取組】 ・主幹教諭は、担任団等と連携して、大学生等を活用した教育活動を実施する。 【関係機関との連携】 ・相談支援部は管理職等と協働して、「江の口子どもまご支えチーム」の効果的な活用方法を確立する。 ・学部主事は、担任団が個々の児童生徒のケースや支援会が適切に実施されるよう支援する。 ・担任団は、学部主事と連携して、関係機関を含んだ全児童生徒を支援するチームを構成し、支援会等を実施する。 ・担任団は、相談支援部と連携し、困難事例について、「江の口子どもまご支えチーム」などを活用して地域の福祉リソースとの連携を強化する。</p>					
<p>働き方改革</p>	<p>働き甲斐のある職場環境づくり</p>	<p>【現状】 (児童生徒) ○児童生徒の良い変化をみて、やりがいを感じている教員もいる。 △児童生徒の実態が複雑で、良い方向への変化が見えづらい。 (教職員) ○協働的で互助力のある職場環境の構築が進んでいる。 △業務等に負担を感じている教員もいる。 【目標】 教職員一人ひとりがチームで取り組み、教職に従事する「意義・やりがい」を持ち続けることができる。 【評価指標】 ・年度初めと比較して、チーム力が上がったと回答した教職員の割合が増加 ・業務面での自己評価が、平均で4以上 ・学校評価アンケートで「責任やプライドを持って教育活動に取り組んでいる」と肯定的な回答をする教職員の割合が9割以上</p>	<p>・衛生委員会は、組織風土づくりの研修を行う(マンカウンター等) ・各学部主事は、同僚性ややりがいのあるチームであるための目標を設定する。 ・各分掌長(事務部含)は、管理職と面談のうえ、担当する組織の業務を改善するための目標を設定する。 ・すべての教員は、学部や分掌のチーム目標達成を実現するための各自の目標を設定し、目標設定シートに記載して実施する。 ・管理職は、育児休暇や年休等の取得奨励、各種会議の合理化を進める。 ・すべての教職員が、教材の共有、ペーパーレス化、GWやgoogle formを使ったアンケートの実施・集計等を継続実施する。</p>					
<p>不祥事防止に向けた取組</p>	<p>不祥事防止に向けた取組</p>	<p>【現状】 (教職員) ○児童生徒についての会話が増えた。 ○教職員のメンタルヘルス ○不祥事発生時の適切な対応 【目標】 教職員の不祥事案を「0(ゼロ)」にする。 【評価指標】 ○校内研修の実施回数 ○不祥事防止委員会の実施回数</p>	<p>・管理職は、不祥事防止月間の一環としてコミュニケーション促進のための手立てを考案実施する。(スローワーク、挨拶、ササカード、仲間同士での啓発等) ・管理職は、年間を通じた継続的な研修の実施する。(法律や新制度の確認等) ・管理職は、年度当初の全職員に対する理解研修(チェックリスト全項目の実施を含む)を実施する。 ・管理職は、全教職員の各ルール等実施状況確認を学期に1回行う。 ・全教職員が「信頼される学校づくりのために」「教職員等による児童生徒性暴力等が発生した場合の対応」冊子データのデスクトップ貼り付け、または、印刷版を所持する。 ・主幹教諭は、同僚性を高めるワークを実施する。 ・総和会は、親睦を深めるイベントを開催する。</p>					